

会 議 録

会議の名称		令和元年度(2019年度)第3回つくば市総合教育会議				
開催日時		令和元年(2019年)8月26日(月)15時から16時40分まで				
開催場所		つくば市役所5階 庁議室				
事務局(担当課)		総務部総務課				
出席者	委員	五十嵐市長、門脇教育長、鈴木教育委員、小野村教育委員、柳瀬教育委員、倉田教育委員				
	事務局	《総務部》藤後部長 《総務課》中村課長補佐、澤頭係長、東泉主査、鈴木主任 《教育局》森田局長、大久保次長、中山次長 《教育総務課》貝塚課長、笹本課長補佐、宇津野係長、青木係長 《教育指導課》朝賀課長				
公開・非公開の別		公開	非公開	一部公開	傍聴者数	10名
非公開の場合はその理由		-				
議題		教育大綱骨子案に関する協議				
会議次第	1	開会				
	2	市長挨拶				
	3	内容				
		教育大綱骨子案に関する協議				
	4	閉会				

< 審議内容 >

事務局：それでは、ただいまから、令和元年度第3回つくば市総合教育会議を

開催いたします。本日はお忙しいところ御出席いただき、誠にありがとうございます
ございます。開催に当たり、市長の五十嵐から挨拶申し上げます。

市長：今日もよろしく申し上げます。

今年 3 回目の総合教育会議、たたき台をつくってそろそろ詰めていく段階
になっては来ていますが、12 月にパブコメをやっていきますので、骨子案と
しては、あと数回の議論になるかなというふうに思っております。前回は議
論をいただいて、生涯学習に関する部分、それから、8 月 3 日に中高生のタ
ウンミーティングを行いまして、そこでも子供たちの様々な本音を聞いてき
たわけですが、そういった部分で要素を幾つかつけ加えたりしました。
是非、つくばらしい大綱に仕上げたいと思っておりますので、よろしく
申し上げます。

今日は、S T E A M 以外のところを協議いただいて、次回に S T E A M に
ついて少し具体的な話をしていくということでございます。どうぞよろしく
申し上げます。

事務局：本日の会議は 16 時 30 分までを予定しております。今回は、教育大綱
骨子案に関する協議を行います。

それでは、ここからの議事進行は五十嵐市長にお願いいたします。

市長：前回、バージョン 2 をお配りしましたが、山本先生の御講演も加えて、内
容を少し修正したものをお配りしております。その前に、今後のスケジュール
の確認をするんですね。事務局から申し上げます。

事務局：それでは、今後のスケジュールについて御説明させていただきます。

お手元にお配りの会議資料 3、こちらを御覧ください。

教育大綱策定に向けたスケジュールとなっております。大綱骨子案の協議
につきましては、本日の第 3 回会議及び 9 月 25 日の開催予定となっております
第 4 回の総合教育会議において行う予定となっております。なお、9 月の
第 4 回会議におきましては、S T E A M 教育に関する内容を予定しておりま

す。このため、本日の骨子案協議につきましては、お配りしてあります骨子案のバージョン3の中でSTEAM教育に関する項目以外についての御協議になります。

具体的には、骨子案をおめくりいただきまして2枚目のところになります。

の「STEAM教育による創造的学び」、こちらの部分と、続きましての「問い続け、学び続ける教師への成長を支援する」。こちらについては、また別途御協議をいただく御予定になっております。

なお、STEAM教育に関する部分につきましては、9月の協議内容を踏まえまして修正していく予定となっております。

なお、本年5月の第1回会議において説明させていただきましたとおり、本年12月から来年1月にパブリックコメント手続によりまして市民意見を募集する予定ですので、11月中旬を目安に大綱素案の調整期限と考えております。このため、日程等につきましては今後の御相談となりますが、10月下旬ごろに第5回の総合教育会議を開催し、大綱の骨子案、中身の部分の最終概要の確認と中身以外の大綱全体の構成等の確認を行いたいと考えております。

以上、簡単ではございますが、今後のスケジュールについての説明とさせていただきます。

市長：では、そういうことで、除外する部分を、別に今後のために触れていただいても結構ですけれども、話をさせていただいて、時間も、限られているわけではないですけれども、ある程度パブコメに載せていただいてズルズルいってしまうところもあると思いますので、詰めつつ、やりとりはメールベース等でも随時していきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

これは、事前に皆さんにお配りいただいていると思いますけれども、どうでしょうか、前回御意見いただいたようなことは幾らか修正を入れていった反映をさせていったと認識はしていますが、例えばソーシャルキャピタル

などと言うなというようなお話もありましたので、その辺は素直に修正をいろいろ入れてありますので、順番に、各委員からまずコメントをいただいて、という進め方でよろしいですか。何か門脇教育長のを見ると、いろいろペンが入っている様子が見えましたけれども、そういう進め方で大丈夫ですか。どんな順番でもいいんですが、たまには鈴木委員あたりから行きましょうか。

鈴木委員：鈴木です。STEAMを除いてと言われてしまって、STEAMが一番引っかかるところではありますけれども。

市長：次回じっくりやりたいと思いますので。

鈴木委員：そればかり言うことを用意してきてしまって、どうしようかと今。

市長：そうですね。参考までに聞いておきますよ。

鈴木委員：いえいえ、かなり根本的な話になるので、次回まで持っていこうかと今思っています。事前に頂いた総務課からのメールで、できるだけ入れたい文言だとか、そういうことでしたので。

市長：前提として、まだはっきり言って文章としては、とても詰め切れていませんので、どちらかというと概念とかキーワードとか考え方という部分について、もう文章のかかりとか、まとめ方としてはまだまだですので、そういう視点からのコメントをもらえればと。

鈴木委員：考え方としては入っているんだろうとは思いますが、私は自由という言葉はどこかに入れたいなというふうに思っています。教育を考えるときに、どうしてもそこに、管理とか指導とかの対極にある言葉だとは思いますが、自由という言葉にいつも引っかかっているので、そこを入れるなり、そこに替わった言葉をどうしても強調したいというふうに思っています。

もう一つは、教職員の方の働き方改革と絡めて、地域と保護者との協働という話がありますけれども、先生方が忙しいこと、本当に重々私もわかっていて、本当に早くどうにかしなければいけない問題だというふうに思っている一方で、保護者もまた、保護者の働き方改革も進まない中で、例えば学校

ばかりが切っていってしまうと、例えば17時以降留守電とかいった場合に、じゃあ保護者の方とはいつコミュニケーションとるのかなどというあたりがちょっと気になっているので、そこら辺をどうしていくかということをごく具体的に考えを入れられたらなというふうに思っています。ちょっとこのあたりで。

市長：ありがとうございます。今日は時間がありますので、自由というのは確かにすごく大事な概念で、今回はどちらかというところと自己決定という部分でそういう言葉を包含してしまっている傾向はあるんですけども、どういう文脈で自由というのを一番、委員としては重要視したいと。

鈴木委員：私たちも含めて、自由という言葉に慣れていないので、自由という言葉を使うと違うふうにとられてしまうことが、ある部分気をつけて使わなければいけないなと思っているんですけども、そこがまだ自分としても詰められていないところではあるんです。

市長：個別の何々の自由というような考え方と、もう少し根本的な、結構広い概念での自由というのがあるのかなとも思っていますが、どんな場面をどちらかというところと想定していたり、あるいはもう少し広義的な人権的な部分まで広がるような概念としての自由という。

鈴木委員：両方だと思っています。何々の自由というのももちろん自由だと思っていて、自由というのは選択肢があるということと私は半分イコールだと思っているところもあるんですけども、教育大綱について話し合う中で、ほかの教育委員の皆さんともこの自由ということについてはお話をしたことがあって、自由を入れたほうがいいんだけど難しいねというところで話がとまってしまっていて、ぜひここでそこら辺を話し合いたいなと思いました。

市長：わかりました。じゃあ、ちょっと自由について話しましょう。管理とか指導の言葉の対極にあるというようなこととお話をされましたので、どうでし

よう、そのあたりで自由についての概念をどう狭めるか、広めるかというあたりも含めて、各委員から御意見をいただければ。もし問いを立てるとしたら、例えば自由と自己決定の違いは何かとかでもいいかもしれませんが、もう少し幅広く捉えたほうが議論がしやすければ、どうですか。自由にしゃべってください。

柳瀬委員：自由については、 の に「自分自身の人生を幸福に生きる自由と自己決定権を手に入れる」というところがちょっと私も気になりまして、これは「と」というのではなくて、「人生を幸福に生きる自由つまり自己決定権を手に入れる」というので、並列ではなくて言い替えたんじゃないかなと思いました。さっきも仰ったように、自分で自分のことを決められる自由というのが一番の自由だと思っています。

もう一つ、自由に関することがあるとすると、 の の「批判的精神」というところなんですが、「こどもと教師・大人の関係においても固定化されず相互に批判的思考をすること、問いを投げかけることが奨励される。」ということですが、この批判的思考というのは、関係が不自由であれば、あるいは権威的なものがあると批判的思考はできないですね。平等で自由な立場じゃないと批判ができないわけなんです。例えば、学校の先生と生徒の間でお互い議論をしたとしても、先生と生徒という立場で、これがある以上、自由な意見交換、批判にはならない。なぜかと言うと、管理する側と管理される側という立場があった場合には、それは自由ではないんですよね。そういう意味で、この批判的思考というのは自由とか平等という、子供たちも発言する権利があるんだとか、そういうことを言うときにとても自由とつながってくるんじゃないかなどと思いました。自由に関しては、その二つぐらい今思いついたところです。

市長：ありがとうございます。そうすると、イメージとしては、管理とか権威主義に対しての自由で、いわゆる権力からの自由というような概念が自由の中

にもあるんですけれども、そういうものと近いイメージでお持ちですかね。

柳瀬委員：二つ、両方を見なきゃいけないと思いますね。

市長：ありがとうございます。小野村さん、どうですか。

小野村委員：私も今、柳瀬さんの仰ることに同意です。ただ、今回、この「世界を変えるSTEAM人材」という本を読ませていただいて、ずっと引っかかった言葉が、「新しいヒューマニズム」「新しいヒューマニスト」という言葉です。「ヒューマニズム」と言ったときには、いわゆる「人間第一主義」というような意味もありますし、またそれは「個人主義」に発展していったという側面もあると思うんです。

その中で、こちらの本の中でも幾つかの学校が事例として挙がっていましたが、その学校で行っていることが「SEL、ソーシャル・エモーショナル・ラーニング」と言いましたか、そういうのが挙がっていて、その学校のサイトにはどこにもSTEAMという言葉が出てこないんですね。

共通しているのは「SEL：対人関係能力育成」という概念がトップに上がってきていまして、そのバランスということはやはり気をつけていかないといけないのかなと。「新しいヒューマニズム」で「人間礼賛」と言いながら、乱開発を続けてきてしまったのが今の私たちの世代であって、自分の自由だから、自分の土地だから、先祖代々の土地をつぶして何を建ててもいいというようなことではなくて、脈々と受け継がれてきている歴史とか、そういったものにも思いをはせるという意味で、「SEL：対人関係能力育成」とのバランスはとる必要があるかと思っています。

市長：そのあたりは、自由が何において制御されるかという部分とすごく密接な、憲法で言えば公共の福祉であったり、コモン・ウェルフェアに対しての自由権をどこまでとるかというあたりだと思いますけれども、そういうことも、何でも自由じゃないというのは確かにそのとおりですけれども、そこをどこまで書けるかというのは、次回のSTEAMなどもあわせて協議をした

いですね。倉田先生、いかがですか。

倉田委員：私も教育の中で見たときに、自由というのをどういうふうに判断するかというのは、私は自己判断とか自己選択、そして自己決定、その後に自己決定とありますが、その辺を言っているんじゃないかと。やっぱり人間性の重視ということで、個人のよさが生きることとか認めることが自由ということとして表現されているのかなと、そのほうが教育の中では望ましいのかなと私個人で思っているんです。

市長：ありがとうございます。自己決定ですね。

教育長。自由について、ちょっと講義をしてもらいたい。

教育長：私は、教育に関連して言えば、自由裁量度という言葉をよく使っています。学校の教師にしてみれば、あまりに自由裁量度が少ないというか、政治的中立性をしっかりと守れと言うことによって、50年以上、教師たちは政治的な行動、発言というものは一切許されないという大変な拘束を帯びて今日まで来ているとみている。主権者教育をやるようにというようなことを、18歳で選挙権ができた段階から、やたらと主権者教育、主権者教育ということをはいるけれども、教師自身が自由な発言ができないんですね。とりわけ政治については自由な発言ができないというような中で、主権者教育などできるわけないだろうと。私は、教師は政治的番外地に置かれていると、50年来そういうような立場に置かれているということはずっと言い続けてきていますけれども、まず学校教育の中で自由ということ考えたときに、教師の様々な意味での学校の運営について、あるいは学級の運営について、教師は裁量度をいかに高めるかということが極めて重要なんじゃないかなと思っていることが一つ。

それから、もう一つは、児童生徒の自由というものも当然あわせて考えないといけないと思います。この場合、児童という言葉、あるいは生徒という言葉そのものにも自由な判断、自由な発言、自由な行動が制御されるという

中身が入っていますね、もう既に。君は小学生なんだから、君は中学生なんだからという、その児童とか生徒という言葉の中に、既に自由な発言とか行動とかは許されないんですよという暗黙の強制力がある。その言葉そのものに入っているのです、そこのところをどうクリアするというか、先ほどの鈴木さんの話で言えば、自由な発言、自分が思っていることを遠慮なく堂々と話をするというようなことが、生徒であれ、児童であれ、許されるんだというようにそこのところを一步踏み出すことは必要なんじゃないかなというふうに基本的に考えています。

市長：そうすると、ちょっと認識を合わせたいんですけども、自由というものが必要と明記するということは、ある種、今はある程度不自由という認識なんですかね。その不自由の中身は、それこそ自由に物が言えたり、自分の考えを表現したりするということが必ずしも今の学校でできていない、あるいは先生に対してそれこそ、なかなか物を言えたり自由な意見を言ったりすることが難しい環境にある。それは、必ずしも個人的に先生が権威主義的に接しているとか接していないとか、そういうことではなく、恐らく構造として今そういうものになってしまっているのか、それとも個別の先生の話だとちょっとわかりませんが、倉田先生、一番直近まで学校現場にいた立場として、今の学校はどれくらい自由でどれくらい不自由というのは、どうでしょう、まず子供の部分、子供は自由に物が言えているか。

倉田委員：正直言って個人差がある。だから、教師がどう教育というものを捉えているかということでも大きく違って来るかなと。校長を中心として学校全体での教育観とか教育論とかにも結びつくと思うのです。でも今までの拘束された時代とは違い個人尊重への流れになってきているのが現実です。ですから拘束するという方向性は、今はないと私は思っているのです。つまり、個人を生かすとか、認めていくという方向でどう考えていくべきか、そういうことでの指導力にもこれは関係してくると思うので、その辺が大きくウエ

ートを占めているのが現実なのかなというのが私個人の感想です。

市長：ありがとうございます。こういうのはやっぱり子供の意見が大切なもので、中学生のタウンミーティングをやって、十数人子供たち来てくれたんですけれども、やっぱり彼らが求めているのもそういうところだなと感じました。どういう学校が楽しいと思うかとか、どういう授業が楽しいのという話をしたら、自分たちで自由に考えて提案できて、例えば行事についてこういうふうに行っていくというものが尊重されるとかというようなことはすごくいろいろな子供たちが言っていたのと、もう一つ印象的だったのは、圧倒的なレクチャー形式は勘弁してくれと、それこそグループディスカッションなりをいろいろして、それを表現していったりするということの授業じゃないと、ちょっと申しわけないけれどもつまらないということ、かなり辛辣な意見を、これはつくば市立の学校だけではなく、県立もあれば私立もいたわけですが、そういう子供たちが、結局それは自分の自由な手法をする機会がなかったり、逆にそれを阻害されてしまうような環境が残念ながら今教室の中では多いということの一つの示唆なのかなと思いますので、そういったことを踏まえて、自由というのを学校の中で、あるいは教育の場で、学びの場に入れていくというのは確かに重要、今、校則の問題など話題になっていますよね。そういうようなことを入れていく必要があるのかなと思いますね。

そういう意味で、自由とは教科書的には精神の自由と身体の自由と経済活動の自由というのがあるんですけども、精神の自由が中心だろうなと思ったんですが、校則という意味での縛りではいろいろな、そういうことまで含めて入っているのかもしれない。校則なくした学校などいろいろ話題になったりしていますし、私、実は全学校の校則を調べたんですけども、一度これ皆さんと共有してもいいのかもしれないけれども、各学校、本当に様々です。すごい細かく書いてあるところもあれば、ざっくりとしたところもあれば、校則がないという学校はなかったです。そういう部分まで、そこま

では恐らく大綱に書くことではなくて次の計画の部分に書く話なので、校則がどうのこうのという話まで多分しないと思いますけれども。

さて、そういうことを踏まえて、どういう表現を入れていくか鍵となる場所は、一つ、今の考えた大前提として、「つくばの教育が目指す転換」の「管理から自己決定への転換」ということがあるわけですよね。だから、管理から、柳瀬先生の話でいけば、自由つまり自己決定ということで並列だという話でしたけれども、この下の部分ですね、オーナーシップの部分のところ。

柳瀬委員：それは、下の のところ、「自由と」というのではなくて「自由つまり自己決定」としたらいんじゃないかというのと、今の の と は、これは主体性を転換するということで、この と というのは非常に重要で、これに十分書かれているんじゃないかなと私は思います。

市長：わかりました。あとの部分では、教育長がこだわっている、学校あるいは先生たちの自由裁量があまりにもないじゃないかというお話が、これはずっとこの中でも恐らく共通認識としてあると思うんですけども、それは、この の 、一番最後のところですね。「教師と学校の裁量権を拡大することで時間の最大化を」、これ別に時間の最大化を図ることが目的じゃないんですけども、裁量権の拡大というのは、その一部には入っているわけですけども、あえてここで自由裁量権という言葉、自由裁量をとか、自由裁量権とあまり言葉として使わないかもしれないけれども、何かそういう表現をしてもいいのかもしれないですけども。どうですか、教育長。

教育長：どこか、1か所でもそれは入れておく必要があると思います。

市長：自由裁量度とか、ちょっと1回仮置きしておきますね。

教育長：前、市長にも提案したことがありますけれども、校長としてどういう教育が望ましいか、やりたいと考えていても、それを裏づけるお金がなかなかない、だから、本当に学校の管理者としてやりたいことができないような

状態になっているものだから、校長の自由裁量経理を潤沢に得ることができたら、つくば市の教育というのは物すごく質的に高まってくるはずで、これは何とか実現する必要があるんじゃないかと思っています。そういうような、先生方が自由に使えるようなお金があるということと同時に、学校の経営だとかクラスの運営だとかについても、自分なりにこういうふうなことをしたいと思っている先生方が少なからずいると思いますので、そういうことが、少なくともつくば市で協力しますよというか、大いにそういう自由裁量を発揮してくださいというような文面がどこかにあるといいなと思います。

もう一つ。私も中学生のタウンミーティング、傍聴していましたが、さっき市長が言ったように、自由がないということが一番不満の中身でしたね。いろいろな行事なども自分たちが企画して運営するようなことをやらせてほしい、そういうことができないのが一番おもしろくないというようなことは大分言っていました。授業中、一方的に先生が話すだけで、君たちはしっかりと聞いていなさいというふうに言われるのが一番嫌で、授業途中でも自分なりの考え方を言いたい、だけれども、それも制約されているというようなことで、一斉授業に対する抵抗感も相当あったなと思って私も聞いていました。

市長：僕自身、休み時間が一番好きでしたけれども、休み時間というのは結局自由だからなんでしょうね。オランダのイエナプラン校に行ったときに、向こうの子供たちは、休み時間という概念がなく、遊びの時間と学びの時間だったりするわけですが、別に遊びの時間は遊ぶだけだけれども、学びのときも帰ってきているんです。そこに恐らくあの子たちは不自由さは感じていないわけですね。それは、それこそ自己決定をして、どういう科目を今の時間やるのかとかというのを自分で決めているわけだし、友達といろいろな話をしながら、自由に意見を言い合いながらプロジェクトを進めていたりということが入ってくることで、子供は楽しく学ぶようになるのかなと。

柳瀬委員：今の話で、の「こどもが自らつくる場所」のところで、「大人が管理するのでなく、こどもを信頼し自主性を尊重することで、」云々、ルールを決めるとか、その辺がさっき教育長が言われた、子供たちが自分たちで主体的に何かを起こすことをちゃんと認めてあげなければいけない。私もずっと言っているんですが、自発的というのと自主的というのをきちんと考えを分けておかなきゃいけないと思うんです。自発的というのは、何かやることが決まっていてプログラムがあるのを自発的にするということで、自発的に宿題をするんだけど、逆に主体的に宿題をするというのはおかしいことなんです。主体的には自分で学ぶんだから、宿題というものとは相入れない。その自発的にやることと主体的にやることというのをきちんと分けて認めてあげる必要があるんじゃないかなと思っています。

市長：ありがとうございます。ほか、この自由について、よろしいですか。文言はもちろんこれから、おおよそ今言ったような部分で、自由つまり自己決定権といったあたりを修正しつつ考えて。

柳瀬委員：すみません、もう1個いいですか。さっきの批判的思考というのをちょっと私こだわってしまして、その前に、「固定化されず相互に」と来たら、「互いに自由で平等な批判的思考をする」というふうに、あるいはちょっと露骨ですけど、非権力的、これはちょっと露骨なので採用は無理ですが。

市長：ちょっと生々しいかもしれない。

柳瀬委員：それこそ力関係に左右されない、自由で平等な関係をつくっていかないと批判的思考と言えないんですよというのをそこに入れてほしいなと思いました。

市長：わかりました。相互に自由で平等な批判的、表現はちょっと。

柳瀬委員：「平等な関係の中」でしょう。

市長：そうですね、関係の中で。その前に関係が入っているので関係がかり

過ぎちゃうので、「こども同士においても、こどもと教師・大人においても」とか、関係を前で落としたり、その辺調整はしますけれども。権威主義に徹底的に抗うということで。そうになっていったら学校変わりそうですよね。何かすごく子供が自由にやっている姿がまさに想像できる。今、プレイパークなども広まりつつありますけれども、あそこにあるのは究極の自由なわけですよね。

よろしいですか、一旦自由についてはこの程度で。自由だけで多分5時間ぐらい議論できますよ。大きなテーマ。

教育長：いじめがなかなか減らないとか、不登校も減らないとか、いろいろなことがあるわけですがけれども、やっぱり学校はなかなか自由度が少ないということが大きな原因になっているんじゃないか。とにかく、さっきも言いましたけれども、小学生なんだから中学生なんだから、児童なんだから生徒なんだからということの枠、その言葉の中にもう既に制約が含まれている、そんな勝手なことはできないんですよというような中身が、君は何々なんだからということだけである種の制約を受けているということに対する抵抗感が、だから学校に行きたくないんだとか、あるいは逆に言えば、俺だって我慢しているんだから、お前だって我慢しろ、我慢しない子供がいるといじめられるというような構造にもなっているんじゃないかなと思っている。どういう表現をするか、自由、平等な関係の中で自由を認めるというのは文章になるといいなと思います。

市長：タウンミーティングで子供が言っていた、これ議事録残っていますかね。
タウンミーティングの子供の発言。

事務局：全部ではないですが、要約したものを配りますか。

市長：配ってください。1人の子供がおもしろいことを言っていて、今の学校にはフリーダムはあってもリバティはないというようなことを言っていたんですよね。なかなかおもしろいこと言うなど。一般的には恐らくリバティと

いう概念のほうが広い概念で、フリーダムというのはもう少し個別具体的な、さっき言ったような表現の自由とか発言の自由とか、そういう部分で、リバティというのはもう少し精神的自由も含むものだと思うんですけども、多分、子供は子供なりにそういうことを感じているんでしょうね。それもフリーダムも全てにあるわけじゃない、たしかそんなことを言った、ちょっとこのメモをぱっと見たらそれは書いていなかったですけども。

教育長：それも私聞いていました。私はその違いを説明できないなと思いましたが、たけれども、そうか、そういう発想もあるんだと。

柳瀬委員：相当議論しないと。

市長：だから、そういうことに対して答えられる教育大綱でなくちゃいけないんですよ。ちょっと正確な発言はあれですけども、後でちゃんと議事録見たほうがいいかなと思いますけれども、そういうことですね。

では、そのあたりで、もちろん何度かやりとりこれからします。

もう1点、鈴木さんから問題提起いただいた保護者、保護者どうするんだという話です。保護者は、最後ぐらいしかあまり書いていないですね。この
の が少しそういうことを書いたんですけども、もう少し踏み込んで、さっき留守電になっちゃう、学校によってちょっと時間違ったりするんですけど、14時40分とか、16時ですね、結局なかなか夜中遅くに電話をかけてきて、何で先生いないんだみたいなことが結構ある。そして、そこから1時間、2時間になっちゃうと、先生たちもそれこそ働けないよということで、今回留守電を入れたわけなんですけれども、鈴木さんの理想とする保護者と地域、学校との関係のイメージをもう少し聞いていいですか。

鈴木委員：理想までは考えていなかったんですけども、本当はもう少し気軽に学校に行かれるといいなと。理想を言ってしまうと、先生たちの働き方改革のこの流れに逆行してしまうところがあるので、自分の中でも矛盾を抱えています。例えばオランダみたいに、保護者の方たちも早く仕事が

終わって迎えに行けるとか、朝もゆっくり出勤なので、学校に子供たちを送りがてら先生とちょっとお話ができるみたいな環境が日本ではない中で、どんどん切っていかれると、いろいろなところでお話していますけれども、家庭訪問もなくなってきて、郵便受けにお手紙入れていくだけになって、本当に先生とお話するときがない。わざわざ何かについて議論するというわけでもないんだけど、ちょっとしたコミュニケーションをとる機会が阻まれているような気がして、やはり保護者としては、学校との距離をますます感じている状態なんです。どう解決していいのかがわからないなと思っているところなんです。

市長：これは本当に悩ましい問題ですよ。学校に行っているのかなと思っているぐらいのマインドの方は全然来てくれていいと思うんですけど、そうではないところにやっぱり対応しなくちゃいけない、別にモンスターペアレンツという言葉は使いませんが、やはりこちらの状況は全く見ないままの一方的な話ばかりになってしまうと、逆にひょっとしたら、日常からそういう保護者もコミュニケーションがとれていれば、そうやってエスカレートすることもないのかもしれないですから、本当に理想としては、ふらっと学校に来られて、先生たちも構えなくて済むと。たまに授業参観とかだからすごく一生懸命準備しなくちゃいけないし、すごく学校を直前に掃除しますみたいなことをやるわけですけども、そんなことをしないでいいぐらいの、それこそ自由なコミュニケーションができると、ちょっとした齟齬とかもなくなる。結局いろいろトラブルになっているのも、最初は小さなことが拡大していったりする傾向はありますので、そういう部分は難しいところですね、これは。どなたか妙案は。

小野村委員：妙案ということではないんですけども、私はもともと公立学校に16年勤務して、今、NPOとして活動しています。例えば最初に保護者の方から話を聞くと、「それはひどい、そんなひどい先生がいるのか」と思うよ

うなお話を聞くこともよくあります。でも、実際にそう思って学校に行ってみて、先生に会ってみたら、全然違うということもあります。逆に、保護者の方が協力的じゃなくて学校では困っていると聞いて、保護者の方と会ってみたら全然違うというような、両方のケースがあって、本当に多分にすれ違っていると。まず、モンスターペアレンツと言われる方々も必死さゆえにそうなっているのであって、会ってみて本当にモンスターだなと思うような人というのはまずいない。実はすごく弱くて困っている人とかということが多いと思います。

とにかく、なかなか妙案というわけにはいかないんですけれども、まず一番大事なのはコミュニケーションで、そのコミュニケーションが十分にとれていないということが問題。だとすると、コミュニケーションの場をどうするか、例えば何度かお話しているように、私も家庭教育学級とかで呼ばれてよく行きますけれども、本当は行きたいんだけども来れないという人がいるいろんな思いを抱えているケースが多いわけですね。だから、そういう意味では、構えて何かをしましょうという場ではなくて、みんながふだん街の中でちょっとした時に触れ合える機会というのを創造していく必要があるんだらうと思っています。そういう意味で、私がずっと言い続けているのは、総合型地域文化スポーツクラブの設置です。何かあったから呼び出されてお話をしましょうという場ではなくて、そういうことになる以前から、小学生と近所のおじさんやおばさん、おじいちゃん、おばあちゃんも一緒にみんなでスポーツができるとか将棋を打てるとか、そういう場所を設けていくことが大事なのかなと。

この文面見ていると、やっぱり学校教育が中心になるんですけれども、先ほどの自由のこととも考え合わせて、その一つの世代、今の中学生の自由を考えるということは、イコール、その前後の世代の自由も、みんながイーブンであることが重要であって、みんながそれぞれの立場から話せるような機

会ということを考えていくことが非常に重要になるのかなというふうに思っています。

市長：この間の山本先生のお話などは正に、サークル的なものがあって共同学習をしていって悩みを共有していって、じゃあどうしましょうと、それもまさに生涯学習であり社会教育だなどという話が出ていましたけれども。

小野村委員：愛知サマーセミナーだったかな、今も続いていると思いますが…。そこで最初に私が受けた授業は、地元の高校の先生が地域史についての講義をしていたんです。私も歴史が大好きなのでおもしろく聞いていたんですけども、その先生が終わったら、そのまま今度は生徒側の席について、さっきまで私の脇で座っていた高校生3人が前に出て、今度はその高校の先生が生徒になって、ホームページの作り方というのが第2時間目の授業でした。生徒と先生が逆になるというその関係がとてもおもしろいなと思って見ていたんです。

そのサマーセミナーには、ヒトゲノムの解析をされていた世界的に著名な榊先生もいらして講義をされていました。そのヒトゲノムの講義に、専門の大学の先生がいて、私がいて、私の脇に小学校5年生が座っているんです。それで、最初に質問したのは大学の先生なんですけれども、次に私が質問して、最後に質問したのは小学校5年生なんです。その先生もとても偉い先生で、「今日の質問の中で小学校5年生の君の質問が一番よかったね」と言いながら、専門家もいて小学生もいて近所のおじさんもいて、みんなで学べる場というのはとてもいいなと思って見ていたんですが、そういう機会がつかばでもとれないかなといつも思っています。

市長：この の のところは、本当はもっと膨らませたいところだし、もっと重要な部分だと思うんです。

柳瀬委員：私もまさにすごく大事なところだと思っていて、どうしても、いつからか、学校と地域というものを分けてしまって、そしてその対話とかコミ

コミュニケーションというような話になってしまったんです。もともと地域社会の中に学校があってという、丸の中に丸があるはずだったのに分かれてしまったんですよね。いろいろ事故とか管理のことがあって門をクローズしました。学校管理のことで学校になかなか入れなくなってしまった、そういう時代の流れはわかるんだけど、今度は学校を開いていくというのをどんどんしなきゃいけない、地域がどうあれ保護者がどうであれ、学校は開き続けていくということをししないと、地域がだめだからとか保護者がだめだからと、それは主体が違うんですから、いろいろな考え方の人がいるわけですから、ひたすら学校を開くというふうに宣言することが大事だと思うんですよね。何かもうほとんど治外法権というか、そんなイメージを持っていてはいけないと思うんです。

とにかく学校を開いて、校庭で散歩できるとか、いろいろな機会に地域の人たちが学校の中に来られるようなことを考えないと、あまりにも管理がきつくなり過ぎたと思うんですね。

倉田委員：学校の立場から。

市長：学校の立場から、どうぞどんどん言ってください。

倉田委員：柳瀬委員さんの言うこと、よくわかるんですね。学校は開かれていないと私もいけないと思うんです。私も自分で今まで勤務して、吾妻小とか筑波東、もうフリーです。いつ授業に来てもらっても構わないし、中には研究所に勤めているお父さんなどは、朝の時間に余裕があるので、1時間目ぐらいはずっと子供たちの授業の様子を見たり、そういうふうにしてくれる保護者もいるし、保護者が自由に中に入っているいろいろな活動もして、教師と連携をとるような方向の体制をとったつもりです。中学校でもいつ来てもらっても結構ですよということで、自由に子供の様子は見に来てくださいと。不審者対策とか、いろいろ一時期ありましたが、一言職員室とか校長室に声かけていただいたらどうぞということで対応していたんですね。それもあります

が、私は一番大切なのは、先ほど柳瀬さんからもありましたように、学校から情報開示、いい意味で開かれた学校ということで、もっと地域に根差していくような、そういう環境を持つことに努力する学校であるべきなのかなと。つまり、地域と密接に結びついて地域のいろいろなイベントとか、そういうものを一緒に作り上げていくという、そういうことをやっていく必要があると思うんですね。だから、いろいろな行事を子供たちが知っていて、じゃあ自分たちはそこにどうかかわれるのか、「参加」じゃなくて「参画型」ですよ。私も地域のそういうものにはお願いしたんです。子供たちがその中に一緒に入って企画運営ができる条件であれば、いつでもそうしたいんです。向こうから要請があって、ただ子供が参加するのでは意味がない、子供たちがそこへ入って、自分たちもその一員だということで企画運営に携わるような、そういう運営の仕方をしてくださいということをお願いしました。ですから、共につくっていくものというか、だから、私のときには、筑波山検定なども子供たちの班で全部つくったんです。試験会場とかも学校で、子供たちが全部審査員になったり、そういうことも子供たちが主体的に活動して、それで充実感を持たせて、地域のよさを知ること。だから、そういうことで学校から子供たちが外へ出向いて、地域と自分たちが密接につながっていかうとする、そういう姿勢を持てるようにすれば、地域とはうまくつながって地域を知るといふ、まず私は子供たちには自分の地域のよさを知らなきゃだめだよと、それで自分がどういうふうに今後していかなきゃいけないのか、その課題も含めて自分たちで研究していくとか、それで地域に貢献、そういうのができるようなそういう人材になってほしいということで進めた記憶がございます。

ですから、学校から地域に出向いてというか、保護者も自由に何でもコミュニケーションとれるような、そういう体制をとることが学校は今後必要なのかなと、そういうふうに思っています。

市長：これは本当に理想的ですよ。子供がきっかけから入っていれば、主体的に、それこそ自由に発想していったって、ただ動員依頼がかかるだけじゃなくてというようなことが本当にできていけばいいですよ。

倉田委員：じゃなければ意味ないと思うんですよ。

市長：そうですね、お客様で楽しむだけじゃしようがないということですね。

教育長：今の倉田さんの話を聞きながら、イギリスのような制度だったら本当にいいなと思って聞いていたんだけど、イギリスの場合は住民一人一人が、この学校は私たちの学校なんだという意識をはっきり持っていますからね。1年、イギリスにいながら、できるだけ学校訪問しましたけれども、イギリスの場合はガバニング・ボディという組織があって、住民も参加しながら、もちろん生徒代表も先生代表も入っているわけだけれども、校長の採用から全部そこが決めるわけね。教員の採用はもちろん、給料はどうするか、カリキュラムをどうするかというようなことさえ、学校に関するほとんどが、ガバニング・ボディが、大体 15 人くらいで編成していますけれども、そういうような組織があって、だから当然、この学校は私たちの学校だという、そういう意識がある。あるとき学校訪問したときに、15 人くらいのクラスの教室の中に行ったら、大人が 4 人くらい立っているんです。最初はなぜ 15 人のクラスの中に大人が 4 人も立っているのかよくわからなかった。お昼休みに、あの人たちはどういう人たちですかと聞いたら、1 人はそのクラス担任の先生、正規の先生ですけれども、残りの 3 人は地域のお母さんたちですね。月曜日の午前中、私時間がありますから子供たちの勉強を面倒見に行きます、午後は私が行きます、火曜日は私が行きますみたいなことが当たり前になっている。あるいは、音楽堂などがあって、ここは立派な音楽堂ですねと言っていたら、地元の人たちが自分たちで金を出して、工事も自分たちがやって立派なものをつくっているという、そのくらいこの学校は私たちの学校なんだという意識がある、そういう状態に日本はなっていないのではなか

なか大変だと。

私の経験からすると、私が小学校、中学校に通っていた頃は、地域の方々は大体先生をリスペクトしていましたね。先生を尊敬していたと思います。だから、学校のほうもいつでもいらしてくださいみたいなことをごく自然にできる。それが今、逆に、学校というのはろくでもないことしているんだとか、先生もろくでもないんだということをマスコミなどでさんざん言われていますので、保護者たちも学校に行くときは何かクレームのために来る、そしてまた、そういうことが続くと、先生方も誰か保護者が来ると、また何かクレーマーが1人来たというようなことを警戒するようなことが続いているために、なかなかいい関係ができないなということが残念ですけども。だから、そういうような状態をどう改善していくかとなれば、どなたかが発言していましたけれども、徹底的に学校のほうが先に開く、警戒しないでどんどんどんな人でも来てくださいということ、広げていく、開放していくということを学校サイドがやらないとだめなんじゃないのかなと思います。

市長：何かその辺は、この の のところにもう少し地域に、むしろ学校から開いていくということは入れていくように考えましょう。そういう話をしながらなんですけども、この間、ある学校の、今、新しく校舎をつくっているところなんですけども、そこに市民の交流スペース的なものもつくりたいと思っているんです。でも、それは今のところ、後でよく協議をしようと思っていますが、今のところそれとは切り離してくれという話が出ていまして、やはりそれは管理上の問題で、駐車場も別にしてくれ、こっちとこっちにしないといけないとかという話になってしまっていて、結局、そこを開くことによって何か起きたときのことを、非常にリスクを高めに見る傾向が恐らく行政というのはあるわけですね。そこで自由にしちゃったらどうするんだと、結局、それこそバーナード・ショーじゃないですけども、自由には責任が伴うわけで、だから人々はそれを恐れると。行政がまさにそれを恐れてい

るわけなんですけれども、その責任をどこまで引き受ける覚悟があるのかというのはすごく大事な部分なんじゃないかな。やっぱり学校に不特定多数がぐじゃぐじゃするということは、どうしても今のところあまり受け入れるようなものにはなっていないのかなと。教育局長どうなんですかね、この辺。どこがそういう話になるのか、市民交流スペースと一緒に学校とかと隣接させて、あまりそこに塀とかをつくらないとかと。

森田教育局長：自分も市長の意見にある意味賛成の部分があって、一部分を開くようなそういう施設をつくるのもいいのではないかなという発想は非常にあります。ですから、一方的にそうはできないという考えではなくて、今検討したいと思っているんですけれども、ただ一つ、学校が開けば本当に開けるのかというのはいつも疑問に思っていて、学校は開かなきゃいけないんですけれども、保護者や地域の方も学校に近寄ろうと思わない限りは、双方向でない限りはそれは実現できないと思うんですよね。ですから、これはできていないから学校がやりなさいという発想は、私はいけないと思うんです。だから、協働という言葉を使ったんですけれども、だから、学校ができていないなら学校もやります、保護者も何が足りないんだったら何かをやりますという、お互いに改善を目指してやっていかないとうまくいかないんじゃないかなと思うんです。だから、もう少し両方向からという意味合いを強くしないと、保護者や地域の方、いつも待ちの姿勢になってしまうんじゃないかなという心配をちょっとしているんです。

市長：さっきのガバニング・ボディなどというのは、まさに主体的にそれぞれ自分たちが学校を運営しているんだということなんじゃないかな。

教育局長：一つの案としては、つくばでつくる新しい学校には、義務教育の場だけじゃなくて、ファンクション一つじゃなくて、さまざまなファンクションを学校の建物の中に新たにつくっちゃう。そういうような案を、ついこの間、未来構想等審議会である委員が、こういう学校にしたらどうですかというア

アイデアを持ってきました。こういうファンクションも、こういうファンクションもあり得るんじゃないかと。これはいい案だなと、私もうすうすそんなことを考えていましたから、どんな理由であっても、学校に入れるというようなことをあらかじめつくっちゃうということも一つの案かなと思いますよね。

鈴木委員：すみません、時間が押しているのに。

市長：じっくりやりましょう。

鈴木委員：学校を開くという話、今出ていますけれども、システムとかではなくて、例えばちょっと感覚的な、感情的な話になってしまうんですけれども。うちの下の子の今年の担任を私はとても尊敬していて、こんないい先生に当たったとすごく喜んでいるんです。最初の学級懇談会的时候に、学級懇談会というのはこういうふうに先生が挨拶する場所なんだな、機会なんだなというふうに感心したんですけれども、「とにかく自分は子供のためだったら管理職とけんかでもします、とにかく任せてください、そしていつでも何かあったら連絡をください」と、「いつでもウエルカムなので」というふうなお話をされたんです。私はこの1点で、この先生大丈夫だな、お任せしたいなというふうに思いました。学校にわざわざ足を運ぶだけがつながっているというわけではなくて、この先生に任せられるとか、あとは学校から文書が来るときの文書の文言とかで、たとえ留守電で17時以降はつながりませんと書いてあったとしても、それでもやはりどうしてもというときには、いつでもウエルカムなんですよという姿勢が見えると、それだけで安心するんですね。かといって、毎日電話するわけではないですから。最後はやっぱりウエルカムなんだと、子供たちのために何かあったらいつでもどうぞ、というふうなこの姿勢だけで、保護者はすごく学校が近く感じて安心できるというふうに私は思います。ですから、システムだけの問題ではないような気がしています。先ほど倉田委員から姿勢というお話がありましたけれども、先生方の言

葉や学校からの文書の端々から見える姿勢も大事だなと思います。

市長：うるさい保護者がかけてくるんじゃない、それが嫌だから留守電なんだみたいなじゃなくて、信頼関係があって、今はこうだけれども、そこにあるものはそもそもお互いのリスペクトがあるわけだし、そういう信頼関係だったら安心できるということですよ。それが残念ながら今はなかったりするのかもしれないですよ。あるところにはあるんでしょうね。

これ個人的な話になるけれども、僕も子供4人ですけれども、今年の三男の担任の先生が、小2なんだけれども、本当に今まで出会ったことがないような先生で、すごいおもしろくて、この間面談に行って話をしたら、うちの子はそんな状態になっていたのかとか、めちゃくちゃやっているんです。授業中うるさいと、べらべらしゃべると。そこで、「うるさい」というのではなくて、「そんなにしゃべりたいなら、ちょっと話にしてくれない」とか言って、そしたら彼は授業を受けないで勝手に物語を書くと、自分のひとり言を。そこから先がすごいのは、それをためておいて、うちの子の名前の文庫をつくって、それを子供たちの前で発表をさせる、読ませると。子供たちがおもしろがって「続きをつくってよ」とか言って、うちの子はまたそれで書いたりして、めちゃくちゃやっています。あとはテスト中とかもううるさいので、答えを口で言っちゃうので、「ちょっとうるさいから外に出ている」と、「わかった」と、机も外に出してテストを受けたりして、あるいは「どこかの部屋で叫んで来て」と言ったら叫んで来て、「すっきりした、もう治った」とか言って帰ってくるとか、そういう自由を本当に彼は享受しているし、そういう中で、面談で「大丈夫ですよ、本当に何でも言ってください」みたいなことを言う、相当肝の据わった先生です。いろいろな経験をしてきた人で、会社員も塾の講師も何とかかんとかと、やっぱりそういう先生がいると思うと、学校にお詫びの電話はしますけれども、「何かこの間、登校中にランドセルをぶん投げてずっと行っちゃったらしくて、それを教頭先生がとりに行ってくれ

たみたいな話で、それですみませんでした」とか。つまりそういう個と個の関係が築ければ、でも先生方も子供が40人もいたりして、全員とそういう関係というのはなかなか大変だろうと思うし、多分教室の人数を根本的に減らしていかなくちゃこういう関係をしっかり築き切るのは難しいのかなと思います。そういうあたりは、それを先生の資質の問題にしてしまってもいけないとも思うし、難しいところですよ。

小野村委員：先生の資質と言われても、私も何もわからないで大学を出てぼんと入って、無我夢中でやって随分失敗をしてきて、その中で私は、当時はまだ荃崎という小さな町だった中で、地域のPTAの皆さんに支えられていました。教育長も言われたように、PTAの協力は大事であり、そういった雰囲気をつくっていくということも大事だと思います。ただ、似たものが集まっていたのでは新しい発見はない、この本の中にも書かれていますけれども、まず教師や地域の人々が一緒に研修を受けるとか、例えば何か一つ、例えばいじめとか、そういうテーマと一緒に話し合う機会を持つとか、直接問題が起きたから会って話しましょうではなくて、今、市長がやっておられるようなタウンミーティングをさまざまな形で一緒に話し合う場が持てたらいいのかなと思っています。

ちょっと時間もあまりなくなってきた、どうしても私言いたいことがあるんですけども、よろしいですか。

市長：どうぞ。

小野村委員：大綱の一番初めに、「一人ひとりが幸せな人生を送るために」とあって。

市長：そうすると、その保護者、地域との関係というテーマとは離れますか。

小野村委員：離れます。

市長：わかりました。一旦、保護者とかの関係については、今いただいたようなことを踏まえて、もう少しどういう要素が加えられるかはちょっと考えたい

と思います。それで、また皆さんに御提案するような形にしたいと思います。
その件で。

柳瀬委員：その件です。結構、保護者とか地域の人たちに、こういうふうにするべきだという文言は僕は避けたほうがいいと思います。確かに地域に資源があります。地域間の社会資源がありますとか、そういうことを言うのはオーケーだけれども、対話しますというのもわかるんだけど、「協力しなければいけない」というような文言は、行政は言うべきではない。よくそういうニュアンスがとれることがよくあるんですね。

市長：わかりました。そうですね、家庭教育に限らずだと思います。ちょっと文言を。

これで鈴木さんから問題提起のあった2点について、ある程度議論をして、順次回っていきこうとは思っていたんですが、回り切らない感じはしますけれども、先に小野村さんから。どうぞ。

小野村委員：申しわけありません。 なのですが、「それぞれが持っている多様で豊かな才能が花開く環境をつくる。」ということで、書かれていることはとてもよく理解できるんですが、ただ「豊かな才能」というところがちょっと私は引っかかっております。何かできることというよりは、「弱みを認め合う」、「弱みを互いに認め合って支え合う」というようなニュアンスのほうがより必要なんじゃないかなと。

STEAMのことは次回ということですが、この中身、なかなかおもしろいことが書かれていて、「不完全さを許容するカルチャー」であるとか、「間違いから出発していく」というようなことが書かれていたかと思えます。私もここは非常に重要だと思っていて、これに関して言えば、の
に「挑戦と失敗が称賛される場所」と書かれているわけですが、ここに、この中でもいいのかもしれないけれども、違いが認められ、受容され、違いが生かされるとか、そういったことを入れていただくと、特別支援と

かそういう観点からもいいのかなと思います。

今、手元に持ってきた本「自閉症という知性」という本の中に、「ニューロ・ダイバーシティ(脳の多様性)」という考え方が出ています。このニューロ・ダイバーシティという考えのもとになったのが、やはりシリコンバレーで、非常に多様な個性がそこに暮らしていると。その中で、シリコンバレーで働く、いわゆる自閉症スペクトラムと言われるような人たちは、障害ではなくても一つの弱みでもあるんですけども、それが強みとなって認め合うことで新たなものが生まれていると。そういう意味では、そういった多様性という言葉をもう少しくローズアップして、ここに とするか、 の中に違いとか多様性という言葉を組み入れていただけるといいのかなというふうに感じます。以上です。

市長：ありがとうございます。今のは概念的な部分での多様性ということで、少しチャンクが小さくなっちゃうんですけども、 の では、ちょっとそういうことを意識しては書いて、「個別の学び」であるとか「個性や環境に合った学びで、特徴、場面に応じて発生する障害・困難さ云々に配慮」というようなことを書いたんですが、多分今の小野村さんのお話だと、もう少し学びの方法論というよりは、場としての多様性を許容しているということが要素として入ってくるのかなと思いますので、その辺はどこかで入れて、むしろ の の「子どもが自らつくる場所」という中にも、その大前提として多様性があって、それが認められているというような表現もひょっとしたらあるかもしれませんけれども、別に新しくつけ加えるのでももちろんできます。それは案をいろいろ考えてみたいと思います。

教育長：前回もこの辺のことを私もコメントしたと思うんですけども、多様性を認めるということは確かに大事なことだけれども、その多様性の中に必ずしもプラスのみというようなことはないんですよと、どんな多様性でもきっちり受けとめるという覚悟があるのかと、この間も山本さんが多分言っ

ていたと思うけれども、「多様で豊かな才能が花開く」というと、才能が花開くことが全ていいんだというようなイメージがありますよね。どんな能力で生まれてきた子供であっても、それは基本的に受けとめるというようなことがもうちょっとあればいいかと、違いが受容され生かされるというような表現がどこかあったほうがいいというのと全く同じだと思うんです。多様性の中にはさまざまな子供がいる、だけれども、どの子の持っている能力みたいなものを否定することはしませんよというような趣旨の文言がどこかに1行あるといいのかなと。さっきも言いましたように、全て豊かな才能が花開くというようなプラスのイメージだけで押さえておくのはどうかなと。

市長：ここでイメージしたのは、そういうことなんですよ。どういうことかという、私も障害者が働く農場をやっていたんですけども、苦手なことがめっちゃくちゃたくさんある人でも、やっぱり得意なことが必ず何かあって、その仕事をするとなんでもないことになるから、そこまですごいわかりやすい差がなかったとしても、やっぱり得意なことと苦手なことがあるので、そういう中で、得意なことにうまくはまれば、それは本人も幸せになるし、周りも幸せになるというような文脈の中で、それをこういうふうにしちゃったんですけども、いろいろな障害特性があって、その見きわめというのはすごい大事、別に障害者のためだけの話じゃないですけども。まさに柳瀬さん、きょう柳瀬さんのとこのアーティストに、彼はやっぱり個別の云々というあれはあるかもしれませんが、障害があるわけですけども、とんでもないすばらしい絵を書いて、それを寄贈してもらったんですけども、その辺、この文言を変えることは全然何の抵抗もないんですが、どういう表現がいいのかなと、柳瀬さん、そのあたりちょっと。日々現場にいる人。

柳瀬委員：才能という、やっぱりどうしても特別なものを感じるの、これは皆さんどう受けとめられるかわからないんですが、「それぞれが持っている多様で豊かな個性が花開く」とかくらいでどうかなと思うんですけども

ね。全ての人というふうに言ったとしたら、才能と言わなくてもいいのではないかなと思いますけれども。

市長：花開くの部分、ちょっと引っかかっていますね。教育長。もうちょっと詰ましましょう。

教育長：花開くというと、ポジティブなイメージが出てくるじゃないですか。

だから、そののところ、今、市長が言ったのは、一人一人は多様だというふうに捉えるけれども、その1人の子供の中の多様性にもポジティブな部分とネガティブな部分があるけれども、全てネガティブじゃないんだから、その子のポジティブなところを開花させるというか、花開かせるということ意識しながらここを書いたんだと言っていましたけれども、なるほどそうかなと。

柳瀬委員：確かに植物の芽であったり、いろいろなんですよ。だけれども、どんな植物でも花開くんですよ。持っているものとして花開くんですよ。それはどんな花かはこちらが期待しているものとは全然違うかもしれないんだけれども、これは教育の一番ポジティブな、大事なところじゃないかなと思っていて、僕はどんな人でも人生何か花が咲けばいいなと思うという願いでは、花開くというのは残してほしいなと思うんですね。

教育長：全てネガティブじゃない、全てポジティブじゃない、そのところを見きわめるのが、ポジティブな部分を花開かせるということは我々は意識しないといけないということですね。

柳瀬委員：あまりきれいな花じゃなくても。

教育長：柳瀬さんの面倒見ている子供たち、私はとてもじゃないけれども太刀打ちできない、真似できない、すごい人がいっぱいいますよね。作品をつくる子供たち。

柳瀬委員：山の中でも道の端でも、いろいろな花を咲かせているんですよ。だけれども、それを見てあげないと見つからないんですよ。それがやっぱり教育の大事なところじゃないかなと思っていて。君もそうなんだよ、君にも

花が咲くんだよと誰にでも言えるという。

教育長：花を咲かすところは残しておくということですね。

小野村委員：柳瀬さんのおっしゃること、とてもよくわかります。ただ、弱みというのは、私はある意味大事だと思うんですよ、すごく。今、日本の子供たちが生きにくいというのは、何がよくないかということ、ダイレクトメールで送られてくる「苦手教科を克服しましょう」とかというのが物すごいプレッシャーになっていると思うんです。それが今回、この本を読んでいて、中でちょっとおもしろいなと思ったのが、「不完全さを許容するカルチャー」ということです。今はもう完全などということはありません。例えば新しくソフトウェアを販売しようといったときに、ソフトウェア販売の時点で完全なソフトウェアをつくらうとは思っていない。ただ、とりあえず今の段階で使えるかなというものを出して、バージョンアップをしながら完全なものにしていくという、そういう発想がこれから必要なんだというようなことがこの中でも書かれていたと思うんです。だけれども、日本の子供たちは未だに、例えば小学校に入ると最初から正しくきれいな文字を書きましょうとか、今、文科省も「ここははねていなくてもいいですよ」とか言っているんだけど、相変わらず、「これははねないとバツです」とか。この間ネットで話題になっていたのは、「筆算の横線を引くのに横線を定規で引かないといけない」という先生がいらして、それで全部定規で引かなかった子が1点ずつ減点されたというテスト答案がネットで話題を呼んでいましたけれども、そういう「こうじゃなきゃいけない」という思い込みがとても強いので、できないところをできるように頑張ることも大事なんですけども、そういう弱みがあるからこそ人間なのであって、そこに美しさもあるんだというようなことを私は強く、ふだん自分が接している子供たちからはそういうものを感じています。

確かに今のお話を聞くと、花を開くというのはいいかなと思います、そ

の不完全さを許容するとか、私はよく「子供たちが試行錯誤する、失敗する権利を尊重する」という言葉をよく使うんですが、そういった面はどこかでもうちょっと、もしここで花開くと残すのであれば、他でそのあたりを少し認めて、完璧じゃなくてもいいんだよというメッセージは伝えたいなと思います。

市長：そうすると、挑戦とか失敗というのは、次に細かい中としては書いてはいるんですけども、大前提のところはどこまでの表現をするかですけども、違いを受容するとか、一人一人が幸せの人生を送るためにそれぞれの違いを受容され、持っている多様で豊かな個性とか、そういう形で、そこにも協調を入れるぐらい、皆さんの問題意識としては。

倉田委員：今、市長が言われるように、教育長も言った弱みということで、私も、それを私は知ること、自分を知ることが前提にあると思うのです。つまり、自分の持っているよさとか能力を自分で分かることにより、社会でそれをどう生かし、育てていくか考えていくことが重要であると思います。花開くというのは、私は個人の持っているよさとか能力が開花することであって、その前に、まず自分を知ることが大切なので、そのためには自分の弱みとか強みとか、そういうものを自分で理解できるというか、その前提で自分をどうしていくかという、そういう一つの流れがあるのかなと私は思っているんです。それには当然、人を知ることによって自分も知る、だからその人の違いもその中で自分は理解して、自分がどういう存在なのかということを知ることが大切なのかなと私は思っています。

市長：そうですね、その部分はしっかり、ここで柱としても入れていますがけれども、その違いを知るという意味では、自分と他者を知らないと始まらないわけですから、ありがとうございます。今話が出たようなことを踏まえて、少しこのあたりは詰めていきたいと思います。

柳瀬さん、どうでしょう。他の部分で今回気になったところとか。

柳瀬委員：一つだけ、これは絶対言わなきゃと思ったんですが、先ほどもちょっと出ていました「挑戦と失敗が称賛される場所」ということなんですが、すごくわかるんですけども、私、高校時代にある友達が書いた作文に衝撃を受けたんです。「失敗は成功のもとというのは間違っている」というんです。失敗は成功のもとと最初に言うのはおかしい。「失敗した後に、挑戦してうまくいかなかったときに、失敗は成功のもとと言うのは正しい」というんです。確かにそうだなと思うんです。最初に挑戦と失敗という概念で物事は始めないなと。つまり、ここは挑戦が称賛される場所がいいんじゃないかと思うんです。その後に「挑戦と失敗は周囲から称賛される。」というふうに書いていますけれども、そこも挑戦は周囲から称賛される、その後に挑戦し失敗を繰り返しながらということで時間が経過するんだけれども、一番最初に失敗が称賛されるというふうには言わないほうがいいんじゃないかと思いません。表現は、文章としてどうなるかわかりませんが。

市長：ありがとうございます。それはそうですね、私もよく自分のこと言うんですけども、選挙で私が学んだのは、やっぱり選挙に負けたときなんですよね。何で学びが多かったかという、本気で勝とうと思って負けたからだと思っていて、最初から負けると思って負けても、多分学びは多くないんだと思うんですよ、負けるつもりだったら。そういうことだったら、すごく文脈としては大事だなと。一方で、しばらく前に、今、アメリカで一番起業家とかを輩出しているところで有名なバブソン大学というところの先生と話したんですけども、彼も「失敗学」というのがあって、要は必ず起業しなさいと、この授業中に。それで、失敗をした数で評価をつけると。失敗の数が少なくて成功ばかりしていたら、あまりその授業としては評価は少ない。それは想定内のチャレンジしかなかったからだろうみたいなこと、それはそれで一方でおもしろい発想だなと思ったりしたんですが、どこまで書くか。その失敗というものをどういうふうに捉えるかというのは、何か表現はしておき

たいなというのはありまして、挑戦、失敗を繰り返しながらという文言だと、失敗が必ずしも肯定的には捉えられないような気もしているので、その辺は少し相談を。今のところ、他の方、どうですか。

倉田委員：私も、柳瀬さんのところ気になったんですね。文言が「挑戦と失敗が称賛される場所」。じゃあ、成功はだめなのかという、そこら辺がちょっと気になりました。ですから、私も、その「挑戦と失敗は周囲から称賛される。」、その前に、「挑戦と成功を目指しての失敗は周囲から称賛される」、当然、成功を目指しての失敗なわけなので、そこら辺の文言をつけ加えることによって緩和されるのかなと。成功が否定されるような、そういう受け取り方もここではなりかねない心配もあったかなと。だから、成功を誰も目指しているわけですから、成功を目指しての失敗というのは非常に価値があるものであるということの意味合いでは、そういうことをちょっとつけ加えておけばなるほどなとわかるのかなと、そういう気がしました。

市長：その辺、どう表現するか正直悩んだところでもあって、挑戦すること自体が既に成功なんじゃないかというふうに思っているところもあるので、挑戦という言葉の中に成功というのが内包されてしまっているところがあるんですけれども。どこかで議論が出ていましたけれども、わかりやすくするというのも少し大事なので、そのあたり、いただいたような御意見を踏まえながら修正していきたいと思います。教育長、この件についてはどうですか。

教育長：確かに柳瀬さんが言うのももっともだなというふうに聞いていました。挑戦し、挑戦し、挑戦しながら、これは常に成功するわけじゃありませんから、失敗することもある。だけれども、それは失敗を貶めないというのが、そういうような表現のほうが妥当かなと思っているんです。だから、いきなり失敗は成功のもとと言っちゃうのは、やっぱりどうかなというふうに思って柳瀬さんの発言聞いていました。

市長：15分だけ延長してもいいですか。すみません。

じゃあ、その部分、どうですかね。倉田先生、どうでしょう。

倉田先生：時間もないので、一つだけ、その前の「学びたくなる場所」というところなんですけど、「遊びから学びへの意欲を引き出し、生きた学びへと循環させていく。」、「遊びから学びへ」、わかるんですが、遊び以外からはどうなんでしょうかという、その辺が少し気になりました。その他には、やはり感動とか出会いとか、そういうものもあって学びへの意欲が引き出されるものもあるのかなと。だから、最初は遊びから始まるものとかと理解し、幼児教育も視野に入れた流れなのかなとも思ったんですね。そういう意味での指導法にも触れたものなのかなということが気になったんですが。やっぱりその辺、遊びということばを強調された市長の考え方がどういうふうなのかなと。

市長：ちょっとこの辺、乱暴でしたね、書き方が。「生きた学び」ということが一つの大きな前提となっているんです。子供が何か日常生活の中などで感じたものから学びが始まってほしいと、これもまたオランダのイエナプランの話ですけども、海岸で貝殻を拾ってきたら、そこからこれは何でできているんだろうとか、どこから流れついたんだろうとか、そこによって理科とか社会とか、いろいろな科目につなげていくようなものができたらいいなというように思い、これだけ読んでもここからはとても読み切れないので、少しこの表現は今後ちゃんと整理をしてみたいと思います。

柳瀬委員：今の、同じように、の ですか、「遊びによる非認知能力を獲得する学び」とあるところですよ。ここの最初の「学びにおける」というのを僕はとったほうがいいんじゃないかと思うんです。いきなり「「遊び」の価値を再認識し、」、学びのために遊ぶみたいな感じが最初に出ちゃうので、いきなり「「遊び」の価値」というふうに言ったほうがいいと思います。

市長：ありがとうございます。「遊びが学びに必要なわけ」という本、この間読みましたけれども、非常にいろいろおもしろく、その辺の要素がここに入っ

ているんですけども。

教育長、たくさんありそうだな、どうでしょうか。

教育長：一番言いたいのはSTEAM。

市長：それは次回にします。

教育長：あと、「非認知能力」というのは、これは最近よく使われることですがけれども、全く説明なしで大丈夫かなと。

市長：入っていないですね。すみません、ちょっとそれは。

教育長：あとは大体、大丈夫じゃないかなと思って読んでいました。

市長：わかりました。では、いただいたようなものを踏まえて、修正をして、また皆様にお送りしたいと思います。次回はSTEAMなので、これ講師は、まだ決まっていない。今、この本の著者を調整をしてもらっているところですので、非常に薄っぺらいSTEAMじゃなくて、STEAMの本質、STEAMが単なるつまらないテクノロジー寄りの話とか、教育産業的な話に矮小化されちゃうのは非常によくないなと思っています。

このあたりで、いいですか。ありがとうございました。一旦事務局に戻します。

事務局：ありがとうございました。先ほどからありましたように、次回の総合教育会議は9月25日水曜日13時から、STEAM教育に関する講演会及び協議を予定しております。詳細は改めて御案内いたします。本日はありがとうございました。

以上

令和元年度(2019年度)第3回つくば市総合教育会議次第

日時：令和元年(2019年)8月26日(月)

15時00分から16時30分まで

場所：本庁舎5階 庁議室

1 開会

2 市長挨拶

3 内容

教育大綱骨子案に関する協議

4 閉会

事務局：総務部総務課

：教育局教育総務課

つくば市教育大綱骨子案【ver.3】

・つくばの教育が目指すもの

- ・一人ひとりが幸せな人生を送るために、それぞれが持っている多様で豊かな才能が花開く環境をつくる。
- ・その環境においてすべての市民が「善き生の実現能力(capability)」と、人と人がつながり、自発的に持続可能な社会を作るための社会力を獲得する。

・つくばの教育が目指す転換

教えから学びへの転換

管理から自己決定への転換

認知能力重視から非認知能力重視への転換

・つくばの教育の柱

「問いから始める学び Question-Driven Learning」

知識を教え込むのではなく、自己・他者・社会を探究する学びを目指す。

「自分自身は何ものなのか？」 自己を知る

強み・弱み・得意・苦手・成長したこと（他者との比較した評価ではない）自分の将来ビジョン、持続可能な世界のために何ができるのか etc. を徹底的に問い、自分自身の人生を幸福に生きる自由と自己決定権を手に入れる（人生のオーナーシップの獲得）。

「周りは何ものなのか？」 他者を知る

どんな人物なのか？得意なことは？苦手なことは？すばらしいところは？ etc. を問いながら、多様な存在と関わり合い、他者の価値を認め、それぞれの強みを活かしながら協働する力を手に入れる。性別、障害、国籍、経済状態などのすべてのちがいに目を向ける。

「社会をどうやってつくるのか？」 社会を知り働きかける

自分はどんなまちに生きているのか？つくばにはどんな魅力があるのか？地球環境からどんな恩恵を生きているのか？ etc. 自己・他者・自然との関係性によって作り出される環境と社会に目を向け、みなぎ幸せに生きるために必要な学び、社会をつくっていくために必要な学びの機会を得る。

・つくばの学びの場はどんな場所を目指すか？

家庭・学校・地域が一体となり、社会全体で子どもを支え、育てる場所をつくる。

学びたくなる場所

学ぶことは苦痛ではなく楽しい (joy of learning) ことを体感し、子どもが通いたくなる学校、学びたくなるつくばを目指す。遊びから学びへの意欲を引き出し、生きた学びへと循環させていく。

子どもが自らつくる場所

大人が管理するのではなく、子どもを信頼し主体性を尊重することで、子どもたちが自主的にルールを作る。大人はすべてのことを子どもより上手くできるという前提から離れ、子ども一人ひとりを認め、期待をする。

挑戦と失敗が称賛される場所

挑戦し失敗することで、リスクを負うこと、自分の知っていることと知らないことを明らかにすること、回復し前進することを学ぶ。挑戦と失敗は周囲から称賛される。挑戦し失敗を繰り返しながら、自ら変化を生み出す経験をすることで自己肯定感を高めていく。大人も間違え、むしろ積極的に挑戦し間違え (大人の無謬性からの脱却) 場所。

・つくばではどんな学びが行われるか？

一斉ではなく、個別・双方向で科学に基づいた学び

一人ひとりの学びを大切に。学校においては、一斉・一方向授業ではなく、個別の学びを推進する。学習の進捗状況はもちろん、それぞれの個性や環境に合った学びを実現する。一人ひとりの個性や特徴、場面に応じて発生する障害・困難さ、外国語での学習環境、経済状態等についても最大限の配慮をする。評価は周囲との比較による点数ではなく、本人の成長によって示される。経験論や精神論に基づく学びでなく、脳科学やエビデンスに基づいた学びを促進する。

協調精神とともに批判的精神を得る学び

物事を論理的に捉え、疑問を持ち、熟慮し、より良い思考へつなげる批判的思考を得る学びを進める。建設的なコンフリクトを積極的に起こし、対話をしながら

合意点を見つけ行動することを学ぶ。こども同士の関係においても、こどもと教師・大人の関係においても固定化されず相互に批判的思考をすること、問いを投げかけることが奨励される。

STEAM 教育による創造的学び

地域の多様な文化と質の高い芸術、自然の恩恵を受ける農業、集積された高度な科学技術等を活かしたつくば独自の STEAM 教育により、創造性と革新性を獲得する。クラスや学年の枠に囚われない異年齢での取組も推進する。地域へ出て直接話し、調べ、働きかける、教科書だけではなく実物を使った学びを促進する。こどもの好奇心を刺激し、こどもが持っている興味を掘り下げ、対話する機会を作り、協働することを学ぶための多様な機会を作る。

遊びによる非認知能力を獲得する学び

学びにおける「遊び」の価値を再認識し、異年齢グループでの遊びを推進することで、挑戦する、やり抜く、自分で考えて動く、責任を持つ、リードする、ルールを作る、ルールを変える、教える、みながより楽しめるようにする、等の創造的学びを得られる機会を作る。

持続可能な社会への視座を獲得する学び

短期的な経済合理性や産業社会のための知識獲得ではなく、地球環境や人類共通の課題に目を向け、持続可能な社会と世界をつくるための学びを進める。

・つくばの学び実現のために何が必要か？

問い続け、学び続ける教師への成長を支援する

教師の役割は教え込みを中心とするティーチングから、問いを投げかけ主体性を引き出すコーチングへ変遷する。自分は学校を楽しんでいるか？こどもの学びを支援することを楽しんでいるか？こどもたちは学校を楽しんでいるか？その子に合った学びができていないか？授業を楽しんでいるか？喧嘩があれば、どう解決すればいいかを考える場に。算数が苦手な子がいたら、どうすれば得意になるかみんなに投げかける場に。片付けをしたら、よりよくするには？と振り返られる教師への成長を支援する。

・STEAM 教育やコーチング、最先端の EdTech など、自ら学ぼうとする教師のための研修を積極的に支援する。

教師が子どもと向き合い、学ぶ環境を整える

多忙を極める教師の働き方改革を徹底的に進める（校務支援システム・行事の削減・留守番電話・部活外部指導員、地域コーディネータ etc. 10月の働き方改革チームの提言）。教師と学校の裁量権を拡大することで時間の最大化を図る。個別ニーズに合った学習やプロジェクト学習を進める上で必要な ICT 環境（EdTech）は利用目的を明確にした上で積極的に導入する（必要な機材はツールとして積極的に活用するが、学びは人間と人間の間、人間と自然の間に起きる認識を持ち続ける）。

保護者・地域と学校との協働が促進される場を整備する

保護者は家庭教育において主体的な役割を担い、地域は人材・環境・資源を生かし、豊かな学びの環境づくりのために学校と協働する。中心部や沿線開発地区、周辺地区の学校が、それぞれの地区で地域の特長を活かした学びを進める。

地域において共同学習を進め、日々の生活の悩みを共有し、改善に向けた行動を取れるよう、保護者、地域、行政、学校の対話を促進する。それぞれの主体を支え育てることで、保護者、地域、学校の間で濃密な人間関係を醸成し、社会力を高め、包摂された地域を実現する。

教育大綱策定に向けたスケジュール

令和2年(2020年) 3月公表スケジュール

作業項目	令和元年(2019年)																
	5月		6月			7月		8月		9月		10月		11月		12月	
総合教育会議	★ 第1回(5/20) 教育大綱策定に向けた PTA代表者との意見交換					★ 第2回 [7/29] 有識者講演		★ 第3回 [本日] 骨子案協議		★ 第4回 [9/25(予定)] STEAM教育に関する 講演及び協議		★ 第5回[(予定)] 大綱骨子案 【最終ver】の確認 ・教育大綱の構成等		↔ 10月末～11月中旬まで 微修正等の最終調整			
大綱策定	↔ 大綱素案の検討												↔ 11/27 【パブコメ】 素案決定 (庁議報告)		↔ パブコメ実施 (12/9～1/6)		

作業項目	令和2年(2020年)					
	1月		2月		3月	
総合教育会議	↔ 第5回 パブコメ結果報告 改正案協議		↔ 最終案報告			
大綱策定	↔ パブコメ 結果集計		↔ パブコメ 改正案検討		○ 公表	
	△ 必要の都度 改正案を議論		○ 最終決定			